ニュースナビ
News Navi
2019年
1月号

今月のテーマ

JR駅の無人化反対！

―障がいのある人が立ち上がった

2017年秋、JR九州は大分市内のJR8駅を無人化する方針を発表しました。〝スマートサポートステーション（S・S・S）〟を導入し、安全はカメラで監視して切符の販売等は機械でおこなうので駅員は不要だというのです。

JRのこの方針に対して、障がいのある人たちが反対の声を上げました。地域の人たちも「高齢者が乗れなくなる」「地域がさびれる」と声を上げました。しかし、JRは強行する姿勢を変えていません。進むJR駅の無人化―問われているのは公共交通の担い手としてのJRのあり方。提起したのは障がいのある人たちです。

■障がい者が声を上げた

障がい者差別をなくすために大分県条例の制定を呼びかけ、条例が制定されたあとも「条例を絵に描いた餅にしない」と地道な活動を続けている『だれもが安心して暮らせる大分県をつくる会』（以下、つくる会）に参加する障がい者や家族は2017年12月、JRの説明会に参加して「無人化されると不安」「不便になる」「前日までに予約というのは差別」と訴えました。しかしJRは「これまでより安全になる」と説明、「ご理解いただくためにていねいに説明する」と繰り返しました。

このままでは駅無人化が強行されると、つくる会は「抗議集会」を呼びかけます。反響は予想以上に大きく、2018年2月12日の「JR駅の無人化に反対する集会」には地域の人を含め約200人が参加しました。参加者からは、「駅の無人化や減便は障がい者の社会参加の妨げになる」「高齢者や学生も困る」と強い反対の声が上がりました。

反対運動の盛り上がりによって動きが変わります。JRは2月16日に急きょ「説明会」を開いて「8駅中7駅の無人化延期」を発表しました。しかし1駅は実施、残りの駅も秋以降実施、しかも大幅な減便は予定通り実施するとのことです。JRへの不満や不信は収まりません。

つくる会は「7駅の延期は反対の声を上げた成果」と評価しましたが、実質的になにも変わっていないことから反対のとりくみを強めていくことになりました。

■広がる反対運動―署名開始

3月17日に牧駅が無人化され、38便という大幅な減便が強行されます。これに対して、つくる会など障がい者たちが中心につくられた三団体は協力して反対署名を開始します。

障がいのある人たちが先頭に立って署名用紙を回し、自ら声かけして署名を集めました。福祉スタッフや福祉事業所も参加しました。地域にも働きかけ、駅周辺の自治会、老人クラブ等も多くの署名を寄せてくれました。JRに働く人など労働団体も安全や地域を守るために参加してくれました。

寄せられた署名は目標を大きく上回り7万3113筆に達します。署名結果を報告するために9月24日に大分市で開いた「無人化反対集会」には障がいのある人、家族、地域の老人クラブの会長、大学の先生、JRで働く人、議員などさまざまな人が参加しました。

「JR九州に7万人の声を受け止める気持ちが残っていてほしい」「駅員さんがいることで安心でき助かっている」「無人化された牧駅で転落事故があった。乗客が通報したのにJRは監視カメラで見つけたと発表した」「議会でもっととりくんでいきたい」等々たくさんの声が出されました。

署名は10月16日にJR九州大分支社に提出されます。JRはていねいに話を聞いてくれるように感じられました。しかしその直後、JRは延期していた2駅について12月1日実施、残りの5駅も実施すると改めて明らかにしました。

「職員を減らし経費を削減する。障がい者や地域は二の次」と宣言しているようです。

■JRはなぜ変われないのか？

なぜJRは地域の声を受けとめることができないのでしょうか？

「JRは外資系企業」という指摘があります。JR九州の有価証券報告書には、大株主に外資系大企業名が並び、アメリカの有名投資ファンドが大量保有と掲載されています。JRの経営者が鉄道事業の赤字を強調して自治体負担を求め利用者に不便を押しつけようとする理由が見えてくるようです。

しかし、JRは国鉄から民営化する時点で公共交通維持のためにさまざまな「しばり」をかけられました。またJR九州には税金から3877億円の「経営安定基金」が投入され、完全民営化の際にも返却されていません。基金の投入は、公共交通を維持するためです。JRの使命は公共交通を守ることに他なりません。

利益追求に走りがちなJRを本来の姿に引き戻すためにも、一番困る利用者が声を上げなければならない状況になっています。

■地域から声を上げ続ける

無人化反対にとりくんできた三団体や障がい者、家族、福祉関係者などはあきらめていません。「あくまで反対する」と宣言し、抗議集会などの行動を続けています。

つくる会の人たちは県条例づくりのなかで、つらかったこと、悲しかったこと、うれしかったことなどたくさんの声を集めて、議会や行政、報道機関などに届け、それが人の心を動かしたことを実感しました。困っていること、ねがうことなど、地域から声を上げ続けることが必ず地域を変えます。だから、あきらめていないのです。

2018年2月12日の「JR駅の無人化に反対する集会」。

小野 久（おの ひさし）
だれもが安心して暮らせる大分県をつくる会事務局

駅無人化に反対する集会（2018年9月24日）での吉田春美さん（肢体障害があり、車いすで生活）の発言

こんにちは。電車に乗るのが大好きな吉田春美です。8月27日のことですが、JR駅無人化反対署名を受け取りに、友人の喫茶店に行くために、高城駅の構内に入った途端に、「障害者を見かけましたら手助けをお願いします」という、構内放送が聴こえてきました。僕が来るのを待ち構えて、音声スイッチを入れたような、わざとらしい不快感を感じました。ヘルパーさんがいて、駅員さんも荷物の搬入路の線路を渡って改札口まで安全を確認しながら案内してくれるのに、余計なお世話だと思ったけど、JR駅無人化を推し進めようとするJR九州の姿を見せつけられた一瞬でした。バリアフリー化を進めている工事中のことならまだしも、地域の人たちに責任を押し付ける態度に、段々と腹立たしい気持ちになりながら、電車に乗りました。

余計な構内放送を聴くまでもなく、僕は、ある日の散歩のとき、踏切の手前のくぼみに落ちてしまいました。中学校から帰っている二人の女の子が困っている様子に気づいて近寄ってきて、「お手伝いしましょうか？」と、声をかけてくれ、車いすの前の小さいタイヤを、持ち上げてもらって、くぼみから上がることができたことがありました。とっても、うれしかったです。

ところで8月27日の時点で、僕の駅無人化反対署名の目標200筆にもう少しでした。僕の家の近くの二つの小規模作業所の人たちからも、駅員さんがいなくなったら不便で困る、絶対反対！　という声を聴きながら、50名の積極的な署名をもらえたことが、署名活動の大きな勇気になりました。その後も、友人をはじめ、訪問看護師や4ヵ所のホームヘルパーステーション、病院看護師、理学療法士、在宅往診と訪問歯科、そして、薬剤師や小児科医院などへと、駅無人化反対署名を広げました。8月の猛暑で外出の機会が制限されなかったら、もっともっと駅無人化反対署名のお願いに行けたと思うと残念ですが、先ほど述べた人たちが熱心に協力してくれて、署名を集めていただいたおかげで、目標の200筆の2倍を超える410筆が集まりました。署名に協力、応援していただいた人たちに感謝と喜びの声を伝えられる日が来ることを切に願っています。

全体目標の2万筆をはるかに超える7万筆超の駅無人化反対署名が集まって、地域住民の駅無人化反対の声を広げられたことはとってもうれしいことです。そして、利益最優先で、利用者の安全軽視、地域住民の声を無視して、公共交通機関としての使命よりも株主の利益を最優先するJR九州に7万人の声を受け止める気持ちが残されていることを願います。